



衣川 官介

『ビター文』

時代劇を見ていたとき『ビター文まけられねえ!』こんなせりふを聞いた記憶があります。『ビター文』??『一文ではありません』何なんだろう?そこで調べてみることにしました。

『ビタ錢』漢字では鏹錢と書き、良錢(銅製の一文錢)と区別される鉄製の一文錢です。別名『鍋錢』とも呼ばれましたが、サビが出たり、財布が破れるなど苦情が多く評判の悪い一文錢でした。それもあって最初に発行された時は銅錢と同じ価値でしたが、だんだんと交換比率が悪くなり、ビタ錢10文と良錢一文が同等とされた時代もあったようです。

庶民の生活には金一両とか銀〇〇匁、など高額の貨幣は関係無く、もっぱら一文錢を使っていました。落語に『時そば』というのがあります。一杯16文のそばを値切ろうと悪知恵を働かす男の話です。『おやじ、いくらだ』『へえ16文でえ』、『手をだ出しな』『ひい、ふう、みい、よお、・・・いま何刻(なんどき)だい?・・・』ごまかそうとして失敗します。

鉄で出来たお金は磁石でつく。ビタ錢を探しに行きました。幸い姫路城の前、大手前広場では毎月2回、日曜日に青空市場が開かれます。取れたての野菜、手作りの小物、中古のCDやおもちゃ、思い思いに並べ立てた店が100軒ほどあり人出で賑わっています。その中には骨董品を並べた店も。30cmほどの薄汚れたザルに古錢がほうりこまれています。四角に切られた厚紙には『1ヶ百円』と書かれていました。用意していった強い磁石でザルの中をゴソゴソ、パチンと最初に磁石にひっついたのは白色の『昭和十二年の五錢玉』でした。目的の古錢は江戸時代に作られた『寛永通寶』です。青黒い古錢を集めて、その上に磁石を走らせます。少し赤錆の出た一つを見つけ磁石を近づけるとひっつきました。ビタ錢です。綺麗な良錢の鈍い音とは異なり高い音がします。二枚ひっついて離れない錢を見つけ、これも。地面に膝をつけザルをガサゴソ、骨董屋の親父さん気を使ってダンボールを渡してくれました。良錢とビタ錢を数枚ずつ選んでいる時、どう見ても銅製の一文錢に見えるのに磁石につくものを発見。『え??何?この一文錢』もちろん買いました。探した古錢は14ヶ、『千円でええわ、磁石につくお金を探しとんか?』『はい!』『これもつくやろ!』昭和40年の50円玉、100円を置いてこれも貰って帰りました。

しかしふしぎです。銅製に見え、手触りも重さも良錢と変わらない『寛永通寶』が磁石につくなんて。これもビタ錢なのだろうか?『寛永通寶』は寛永13年(1636年)から幕末まで鑄造された一文錢で江州坂本をはじめ色々の地域で作られています。この磁石につく一文錢は何なのでしょう。古錢に詳しい方がおられましたら是非お教えてください。



磁石に少しついた (い)



磁石につかない 磁石に少しつく 磁石につく(ビタ錢)



裏面

「鉄のふしぎ博物館」開館
来て!見て!ふれて! ふしぎ体感

鉄を見る目が変わりますよ。
ぜひお越しください。

強力なネオジム磁石

石ころ

見学にはご予約が必要です。申込書をメール又は FAX でお願ひします。様式は以下にあります。

<http://www2.memenet.or.jp/kinugawa/museum/hushigi.doc>

むらの鍛冶屋®



何でもお気軽にお尋ねください!!